

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺
住職 大島 祥明



故人の死後の状態をみる

カウンセラーが僧侶の役目

私は僧侶という存在は、「医師もしくはカウンセラーのようなもの」ととらえています。

「本人」の成仏の状態をいわばチェックし、いまどういふ状態にあるのか、未練や悔いがあるか、

思い残したことはなにか、やってもらいたいことはなにか、

どういうことをしてもらったら故人は安心するのか。

——そのことを故人から感じて受けとり、遺族に対してアドバイスする。つまり手助けする役目だと思っています。

さて、前にも述べたように「本人」によって、この世の未練が絶ちきれて成仏にいたる期間には個人差があります。僧侶にその状態がわかり常にチェックできればよいのですが、これは能力的にも物理的にも不可能なことです。

そこで、「初七日」「四十九日」「一周忌」「三回忌」……「五十回忌」と年忌法要を重ねることによって、いわば「定期検診」をしているようなものなのです。

その法要のたびに、遺族に対してアドバイスをさしあげるのが僧侶の役目だと思います。

しかし、その際も、**供養する主体はあくまでもご遺族なのだ**、ということを決して忘れないでほしいものです。

●大島祥明住職著『死んだらあしмай、ではなかった』(PHP研究所刊)より抜粋。

同著の問い合わせ ☎03-32239-6257
(PHP研究所ビジネス出版部)